

## 川端康成の少女小説

——「少女俱樂部」掲載作品の素材を中心に——

中 嶋 展 子

### 一、昭和八年前後の川端作品

川端は、最初の児童向け小説「薔薇の幽霊」（昭和2・10「少女世界」）を昭和二年に発表し、その後「少女俱樂部」（昭和4・3）に少年向けの小説「級長の探偵」を執筆したが、少女向け小説が本格的に書かれ始めるのは、「少女俱樂部」（昭和7・12）に発表した「愛犬エリ」からである。その後「開校記念日」（昭和8・2）、「夏の宿題」（昭和8・7）、「学校の花」（昭和8・9）、「昭和8・12」、「薔薇の家」（昭和9・2）、「駒島温泉」（昭和10・2）、「弟の愛犬」（昭和10・12）、「翼にのせて」（昭和11・6）、「コスモスの友」（昭和11・10）と「少女俱樂部」に書き続けた。その後の「乙女の港」（昭和12・6）、「昭和13・3」からは雑誌「少女の友」に移っていく事になった。

「少女俱樂部」に続けて作品を寄せた昭和八年前後の川端は、一方では、大人向けの作品として「禽獣」（昭和8・7「改造」）を発表している。川端は「文芸時評 六 龍胆寺雄氏の『風』（昭和

7・2「新潮」）で、龍胆寺雄の「新感覚派以後のあらゆる文学運動は、解体された小説の破片のそれぞれの一つの新しい理論と作品との展開行動」であったが、「そろそろこれらのものの統一が企てられてもいい」という「新興芸術派の消息」（昭和6・12・22）「読売新聞 朝刊」に触れている。また「新感覚派も、プロレタリア派も、近代派も、新心理派も、それらの悉くが、古い「ロマン」が滅びて新しい「ロマン」が興るまでの過渡期の、研究室や実験室の試験管的なまたは顕微鏡的な仕事」であった、と「新興芸術派の消息」の趣旨をやや詳しく述べた龍胆寺の「ロマン論」（昭和7・1「近代生活」）を川端が要約した。そして、川端もそれらの文学運動を龍胆寺と同じように見、「今日の文壇の病所を突いた論である」としている。ここから、横光らと興した文学運動の「新感覚派」も、川端が近づいたモダニズム文学や、横光の「機械」に衝撃を受けて取り入れた新心理主義文学も「過渡期」の運動であり、決定的なものになる事ができなかったと思ひ返している川端が見出せよう。

また、「三月文壇の印象」（昭和8・4「新潮」）でも、「今日の舞踊も文学も、一般世間に対して、殆んど無力な現れ方をしてゐる」「近頃は純文学の危機が叫ばれてゐるが」「大衆文学のために減ぼされるやうな純文学ならば、その寿命を一日二日延ばさうとするよりも、むしろ私はその死を早める方に力を添へたいくらいゐるの氣持である」と純文学の無力を語っている。このような純文学の危機的狀況は、昭和八年二月二十日の小林多喜二の虐殺によるプロレタリア文学の衰退により、大衆文学と対峙せねばならなくなつた純文学の現状とも重なつていよう。この狀況が文芸復興へとつながり、昭和八年十月に純文学を守ろうとする姿勢の雑誌「文学界」が創刊される。川端もその同人となつて活動した。

文学の無力さに心を碎いていた川端であつたが、この時期の作品の中にもその暗さはただよつてゐる。たとえば、昭和七年九月から「東京朝日新聞 夕刊」に連載された「化粧と口笛」で、四人の男女の關係にもつれが生じ、掛け違ふ事でどうにもならなくなる恋愛模様を書いてゐる。そして「禽獸」でも虚無的な「彼」を書き、昭和九年から雑誌に分載された「虹」（昭和9・3「中央公論」、昭和9・4「文芸」、昭和9・6「文芸春秋」、昭和10・10「中央公論」、昭和11・4「モダン日本」）では、そのヒロイン「銀子」の死を書いた。「虹」に書かれる踊り子の「銀子」は、関東大震災後の瓦礫の中で強く生きていこうと決意した小説「空に動く灯」（大正13・5「我觀」）の「お花」や、「浅草紅団」（昭和4・12）

昭和5・2「東京朝日新聞 夕刊」、昭和5・9「新潮」、昭和5・9「改造」での浅草の中を夢幻自在に駆け回る「弓子」など、自分の生き方を信じて進んでいく主人公とは異なり、生きることの意味を見いだせないで、眠りについたある日に息をひきとつてしまふ事になる。この頃の川端の作品内容には、どうにもならない現実を眺め諦念の中にいる人物像が描かれていゝと考へられる。<sup>注</sup>

このように昭和八年前後の川端は虚無的な色調を帯びたものを發表していたが、同時期の児童向けの作品には明るさも表現されている。ここではまず、川端の大人向けと子供向けの作品のありようを見ていく前に、川端が児童向けの作品を書く時に取り入れた作品資料に目を向けたい。

## 二、川端の少女小説を中心とした素材について

川端が「少女俱樂部」に書き始めた最初の小説「愛犬エリ」（昭和7・12）は、尋常三年の「鑿子」と担任の「遠藤先生」の交流を、「エリ」と名付けた犬を通して描いた作品である。「愛犬エリ」は「少女俱樂部」昭和五年十月号の中根栄「盲導犬哀話」を下敷きにした作品であると、羽鳥徹哉氏が「川端康成解説」（『日本児童文学大系23』昭和52・11 ほるぷ出版で指摘している）。

続く「開校記念日」（昭和8・2）は、六年生の「まさ子」と「ま

「さ子」の親友の活発な「夏子」「親しみにくい寂しさ」のある「よし子」が中心の小説である。書き出しは「日毎に通ふ学校の」という歌で、開校記念日に六年生だけで歌う唱歌「開校記念日」の練習をしている所から始まる。二番の一行目まで歌った所で「尋常小学唱歌」教科書の六年用を、教はつた皆さんならば、御存じでせう。その本の第十課、「開校記念日」といふ唱歌です」と紹介される。ここでの六年用の唱歌の教科書は、「尋常小学唱歌 第六学年用（第一期 国定唱歌教科書）（大正3・6・昭和7・11 文部省）である。『尋常小学唱歌』で「開校記念日」が選ばれたのはこの時期のものだけで、六年用は十九課から成り、十課に「開校記念日」が掲載されている。「開校記念日」は、各章ごとに唱歌「開校記念日」が効果的に用いられ、「まさ子」に「夏子」、「よし子」の三人の友情が描かれた作品となっている。

「夏の宿題」（昭和8・7）は、女学生の姉「郁子」が教わった事のある「森本先生」に妹の「幸子」も習っており、夏休み中に姉妹で先生に書いた手紙で構成された小説である。

「二」の「姉の手紙」では、「郁子」の視点から妹「幸子」との会話が書かれている。姉が妹に、一度教わったら一生の先生になる例として、卒業の少し前に六年の修身の授業で習った伊能忠敬の事を教える。「郁子」は、「伊能忠敬つて偉い地理の学者は、自分より十九も年下の人のお弟子になつて」「——そしてね、年下の先生の方が十五年もさきに死んだんだけど、忠敬は学者にな

れたのはその先生のおかげだと、一生忘れないで、自分が死ぬ時にね、先生のお側に葬つてほしいつて遺言したの。今でも浅草のお寺に、先生と忠敬のお墓が並んで建つてゐるのよ」と話す。「尋常小学修身書 卷六」（第三期 国定修身教科書）（大正12・昭和13 文部省）の全二十七課中「第二十二課 勤勉」に、忠敬は「自分より十九も年下の至時の弟子になつて」とあり、また「第二十三課 師弟」に「忠敬は七十四歳でなくなりましたが、死ぬ時に「自分にこれだけの事が出来たのは全く高橋先生のおかげであるから、自分が死んだ後は先生の側に葬ってもらひたい。」と家族の者にいひのこしました。今でも浅草の源空寺には、この師弟の墓が並んで立つてゐます」という箇所が見られる。

続く「二」の「姉の手紙」では、「鎌倉の海岸は、まるで銀座通りが引越して来たやうに、流行の海水浴の展覧会みたいに賑やかで、西洋人も多く——『七里が濱のいそ傳ひ』それから『由比の濱邊を右に見て』などと、六年の説本や唱歌で習ひ、国史でも教はつたのが、ここかしらと、郁子是不思議でなりませんでしたわ」と鎌倉について「郁子」から先生に書き送っている。ここでの「七里が濱のいそ傳ひ」「由比の濱邊を右に見て」という歌詞は、『尋常小学唱歌 第六学年用（第一期 国定唱歌教科書）（大正3・6・昭和7・11 文部省）の十四課「鎌倉」で歌詞の末に「尋常小学説本卷十二所載」とある。川端の「夏の宿題」では、「六年の説本や唱歌で習ひ」と書かれており、川端は唱歌に目を通し

た後に「尋常小学国語読本 卷十二」(第三期 国定国語教科書)(大正12〜昭和13 文部省<sup>註</sup>)「第七課 鎌倉」を参考にしたのではなからうか。国語読本には「鎌倉」が唱歌に所載されているという記述はなく、「夏の宿題」に引かれた歌詞の漢字の表記は国語読本のものになっている。<sup>註</sup>

「学校の花」(昭和8・9〜昭和8・12)は、昭和八年九月から十二月までの四回連載の小説で、一度に二章分が掲載された。ストーリーは入り組んだものになっている。女学校一年の「千花子」は三年の「清水さん」から、学校を辞めることになるかもしれないと打ち明けられる。「清水さん」は、自分が貰い子だという事を知り、義理の弟を中学に進学させる為に女学校を辞め百貨店の食堂で働くようになる。「清水さん」から学校を辞めるかもしれないと聞いた「千花子」は、夏休み中、海辺の町の臨海学校に行く。そこで小学生の「行雄」と出会う。「行雄」は、町廻りをする役者の一座にいるいじめられている少女「小夜子」を助けたいと思っていると「千花子」に言う。「千花子」も「小夜子」と話すようになり、東京で再会する約束のしるしにいつも肩に載せている「小夜子」の鳩を譲りうける。「行雄」と「千花子」は東京に戻り鳩を育てているが、ある日鳩がいなくなる。それは「小夜子」の一座が東京に来ており、「小夜子」が「行雄」の家まで来た時鳩がついて来たからであった。鳩を返しにきた「小夜子」を見つけた「行雄」は、「小夜子」を引き止める為に「千花子」を助ける。

呼ぶと「清水さん」もついてくる。そこで、「清水さん」が持っていた姉妹の写真を見た「小夜子」は、「清水さん」が姉だと気づき二人は再会する。その場で「千花子」は、「小夜子」が一座から抜けたら家に来てほしいと願う、内容である。

「学校の花」(昭和8・10)「三」では、臨海学校での「武田先生」が小学生の「行雄」らに、人間の瞳に景色が写るのは「眼球がレンズと同じやうな働きをする」からで「理科の第二十九課レンズで、そのことは詳しく教へる」と話している。続けて、「――その前に一つ五年の復習だ。潮の満干がどうして起るか、知つてる人？」ともある。

ここでの理科についての会話は、「尋常小学理科書 第五学年児童用」(第三期 国定理科教科書)(大正12〜昭和4 文部省<sup>註</sup>)「第三十三 海」、「尋常小学理科書 第六学年児童用」(第三期 国定理科教科書)(大正13〜昭和5 文部省<sup>註</sup>)「第二十九 レンズ」第四十四 なる・せきずる・神頭・感覚器、「尋常小学理科書 第五学年児童用」(第四期 国定理科教科書)(昭和5年〜昭和17 文部省<sup>註</sup>)「第三十三 海」、「尋常小学理科書 第六学年児童用」(第四期 国定理科教科書)(昭和6〜昭和17 文部省<sup>註</sup>)「第二十九 レンズ」第四十四 なる・せきずる・神頭・感覚器」が該当する。理科の国定教科書児童用第三期、第四期と同一内容の為、特定する事はできないが、「学校の花」が書かれた時に使われていた教科書の内容であると思われる。

また上記の理科の会話の後、毎日、海で泳いでいる「行雄」達の様子は「やはり六年の読本にあるやうに、／吹く潮風に黒みたる／はだは赤銅さながらに／の『我は海の子』に皆がなつてしまつてゐて」と書かれている。これは、『尋常小学国語読本 卷十二』（第三期 国定国語教科書）（大正12～昭和13 文部省）「第十九課 我は海の子」に見出せる。

この「学校の花」執筆後に、最初の少女向け小説「薔薇の幽霊」を書き換えた「薔薇の家」を執筆し、しばらく少女小説から離れた。川端は「学校の花」の出来た頃、私の掛りの『少女倶楽部』記者藤本三三氏は出征中、藤本氏に次いで私掛りの斉藤喬孝氏は病没した」（改造社版『川端康成選集』第五卷「あとがき」昭和13・10）と語っており、「学校の花」まで書ききった頃、担当者の不在にあった事を知る事ができる。しばらく少女小説から離れたのは、担当者の不在とかかわっているとも考えられる。

ここまで「開校記念日」「夏の宿題」「学校の花」が参照したと思われるいくつかの資料を中心に見てきた。昭和八年の「少女倶楽部」掲載作品には教科書をもにした記述が数多く確認された。このような、昭和八年の「少女倶楽部」掲載作品での教科書の引用は、川端の少年向け小説である「級長の探偵」（昭和4・3「少年倶楽部」）で理科の教科書と取り入れた事が契機となっていると考えられる。「級長の探偵」の理科の教科書についての記述は次の通りである。

「級長の探偵」は、級長の「文雄」と、農繁期の手伝いの時、稲で目を擦って盲目となった「清一」の犯人さがしの物語である。「級長の探偵」は四章から成るが、全章にわたる六年生の理科の授業風景が描かれている。そこでの授業内容も学期分けをしており、実験の手順も事細かに述べられている。小学生向けの教科書には学期を示す記述は無く、実験内容も簡素化して紹介されている。ここから、「級長の探偵」で参考にされたのは、学期分けと実験の内容の詳細な記述のある『尋常小学理科書 第六学年教師用』（大正8～大正12 文部省）であると考えられる。ちなみに、この教師用の理科書は、「級長の探偵」が書かれた時期に使われていた『尋常小学理科書 第六学年児童用』（第三期 国定理科教科書）（大正13～昭和5 文部省）より一つ前のものがあたっている。

本文には、「第二学期 第五課 海藻（一時間）」「第一学期 第十五課 二枚貝（二時間）」「第二学期 第三十二課 硫酸・硫酸・硝酸（二時間）」「第二学期 第四十三課 光の屈折（二時間）」「第二学期 第四十四課 凸レンズ（一時間）」「第三学期 第四十八課 電流（二時間）」「第三学期 第四十九課 電燈（二時間）」が引かれている。

たとえば、「級長の探偵」の「三」では、「文雄」は光を失った「清一」に学校で教わった「光」について話せなideた。すると「清一」はその授業の事を知っており、「文雄」に学校での実験の話をする。

「消一」の「光」の実験の説明は、「——第一に、棒を斜めに水に入れると、棒は水ぎはで折れたやうに見える。これも光が屈折する証拠だ。第二に、洗面器を日向に出して、器のふちの影が底に落ちるところへ、しるしをつけといて、それから静かに水を入れると、影は器のふちに近い方へ動いて来る。これは光が空気から水に入る時、水面に遠ざかるやうに屈折する証拠だ。第三に、茶碗の底へ銅貨を入れて——」と話す。

『尋常小学理科書 第六学年教師用』（大正8〜大正12 文部省）「第四十三課 光の屈折」の「教授事項」「一。光が空気より水に入るときの屈折」「実験（一）」では、「光の方向が水面に対して斜なるときは、光は水面に於て其の方向を変じ、下の方に折れて水中に直進するを見る。これにより、光が空気より斜に水に入るときには元の進路よりも水面に遠ざかる様に折れて直進するを知るとあり、水槽に棒を斜めに入れた図が付されている。続く「二。光が水より空気に出づるときの屈折」「実験（二）」には、「茶碗に銅貨を入れて机上に置き、銅貨の見ゆる所より退きて丁度茶碗の縁に遮られて銅貨の見えざる所に止り、然る後この茶碗に水を注ぎ入る、に銅貨は再び見ゆ」とある。この茶碗を使った実験は、教師用でのみ見ることが出来る（『尋常小学理科書 第六学年児童用』（第二期 国定理科教科書）（大正8〜大正12 文部省）・（第三期 国定理科教科書）（大正13〜昭和5 文部省）には載せられていない）。しかしここで「文雄」が言う「光の反射」「平面の

鏡」「光の屈折」次の週の「レンズ」という各課の名称は、『尋常小学理科書 第六学年児童用』（第三期 国定理科教科書）（大正13〜昭和5 文部省）の「第二十六 光のはんしや」「第二十七 平面の鏡」「第二十八 光のくつせつ」「第二十九 レンズ」が採られたと思われる。

「四」では「消一」によつて「四角な錫の箔の其中を、細く糸のやうに切つてね、電池に結んだ銅線を、その錫の箔の両端につけると、そこに電流が通つて、箔の細いところは赤く火になつて、溶けてしまふんだ。それからまた、鉛筆のやうに端の尖つた二本の炭素棒に、裸の銅線を巻いて、乾電池につないでから、炭素棒の尖を軽く触れ合すと、火になつて赤く光るんだ。こんな風に電流が熱を發し、光を出す作用を利用して、電燈を考へ出した。——ねえ、さうぢやない？」と「電燈」の実験が詳細に語られる。

この実験内容には、『尋常小学理科書 第六学年教師用』（大正8〜大正12 文部省）「第四十九課 電燈」の「教授事項」「一。電流の發熱作用」「実験（一）」に見られる。「長方形の錫の薄片を圖の如く切りて中央を糸の如く細くなし、これを黒き紙の上に置き、乾電池に繋ぎたる二本の銅線をこの錫の薄片の両端に触れしむるときは、錫の細き部は熱せられて熔くるを見る。又一端を尖らしたる二箇の炭素棒に銅線を巻附け、これを乾電池に繋ぎ、これ等の炭素棒の両端を軽く触れしむるときは、その接触部は熱せられて光を放つ。この実験にて見る如く、電流は金屬或は炭素の細き



部を通ずるとき其の部に熟を發せしむるものなり」という部分が用いられている。「綴長の探偵」では、主に「尋常小学理科書第六学年教師用」(大正8〜大正12 文部省)を用い「尋常小学理科書第六学年児童用」(第三期 国定理科教科書)(大正13〜昭和5 文部省)を参考にして理科の授業の様子が書かれていると言えよう。

「綴長の探偵」(昭和4・3「少年倶楽部」)が発表された年の十二月から、「浅草紅団」(昭和4・12〜昭和5・2「東京朝日新聞」夕刊、昭和5・9「新潮」、昭和5・9「改造」)を川端は連載している。浅草の事が書かれた新聞や本の記事をノートにするとという「浅草紅団」での、川端の創作方法が、「綴長の探偵」に反映しているのではなからうか。川端は「文芸時評 二 文学と専門知識」(昭和7・11・29「読売新聞 朝刊」)で、専門書の「なかに散らばった無数の例話の、痛烈な真実に思ひくらべると、(中略)作家が見聞しまたは空想する材料が、話の種として、弱く貧しいことは、はじめから分つてゐる」とし、専門書の方が「真相を深く鋭くとらへてゐるやうに見えることが多い」と語っている。専門書や専門知識を重んじる姿勢は、川端の創作に対する取材の方法に生かされているように思われる。

### 三、「学校の花」と川端作品における母恋いのテーマ

ここまで、「少女倶楽部」掲載作品の素材を見てきた。次に内容について考察して行きたい。「学校の花」の中の「千花子」宛ての手紙では、「尋常四年の読方」で習った川柳を通じて、「清水さん」が貰われてきた子だということが語られる。手紙には、先生が「乳嚙むを叱りながらも歯を数へ」といふ川柳を例に引いて「母心のありがたさをお話になつてから、『お母さんに口答しない者は手をあげてごらん。』と言うと、たった三人が手を挙げただけだった。後でその三人で話をして、皆お母さんがなく「継母」だとわかり涙した。そして、「わがままな口答もゆるされてこそ、ほんたうの親なのよ」と手紙に告白している。

これが十六歳の「清水さん」の思い出の授業だということは、「尋常四年」の授業で用いられた教科書として「尋常小学国語読本 巻七〜八」(第三期 国定国語教科書)(巻七 大正9〜昭和11・巻八 大正10〜昭和11 文部省)が考えられる。しかし、この時期の国定教科書には川柳はとられていない。教科書の引用が目立つ昭和八年の少女向け作品の中で、ここだけ教科書にとられていない川柳を川端が用いており、そこにこの歌への川柳の特別な思い入れを見てとることができるのではないか。この川柳には、母親の無償の愛が詠まれているのである。

引き続き「学校の花」の内容に目を向けると、「女学生は今もなつても、唇がまだお母さんのお乳で濡れているのかしらと思はれるほど、うひうひしい」「千花子」に、両親のない「清水さん」は、悩みを打ち明ける。そして、「清水さん」の実の妹の「小夜子」も「千花子」を慕うように書かれている。「千花子」のお母さんのお乳で濡れているような口もとについては次のようにも言われる。「千花子のこんな口許を見てみると、上級生は無論のこと、同じ一年生でも、千花子のお母さんかお姉さんになりたいやうな気持ちにされてしまいます」とある。そんな「千花子」が女学校で、「妹が出来さうなの」と「小夜子」のことを皆に話し、「小夜子」が一座から出たら「家へ来てもらふわ」と言っている。皆から乳飲み子のように可愛がられていた「千花子」が、これからは「小夜子」の「お母さんかお姉さん」になりたいという希望を表明しているのである。

「学校の花」では、母心のありがたさや、母親に甘えるような「千花子」の容姿が書かれ、さらにその「千花子」がお母さんかお姉さんの役を果たしたいと思ひ始める事が記される。しかし、結局「清水さん」と「小夜子」が母親に巡り合いそれが成就するという訳ではなく、「四」「五」と続けて二回出てくる「清水さん」の手紙の川柳を含むエピソードによって、母心のありがたさが独白的に描き込まれる所に留められているのである。また、中根栄「盲導犬哀話」を下敷きにした「愛大エリ」の、川端の創作部分

にも、母親の愛が書かれている。主人公「綾子」に先生は、「犬のお母さんが、どんなに子供を大事にするか一つを見とくと、赤坊の時の綾子さんを、お母さんがどんなに面倒を見て下さったかが、きつとよく分りますよ」と言っている。その他にも夏休み中に「千花子」が行った臨海学校で、「行雄」らが「武田先生」の事を父さんと呼んでおり、両親を求める切なさも書かれている。

このように、川端の少女向け小説には母を恋うというテーマが見出され、「学校の花」ではそのテーマが色濃く表れていると言えよう。

すでに記したように川端が少女向け小説を集中して執筆していた昭和八年には、大人向けの小説では「禽獣」（昭和8・7「改造」）を発表している。「禽獣」やその他の作品から、母もしくは両親について記した文章を挙げてみたい。

「母」（大正15・3「婦人グラフ」）では、「胸の病氣」にかかった「夫」が「妻」と「子供」を近づかせないでいると、「妻」は病氣を貰おうとして「夫」に必死で口づけをしようとする。とうとう同じ病氣にかかった「妻」は、部屋に入る事ができなくて泣いている「子供」の声を聞き「夫」と話をするうちに、私はあなたと結婚した事を幸福に思っているからあの子にも結婚させてやってくださいと遺言する。この掌編小説の書き出し部分と末尾部分には、「夫の日記」として「妻」と娘に宛てた歌が挙げられて



おり、「妻」に「よき母になり給へよ／よき母になり給へよ／われわが母を知らざれば」とし、娘に「よき母になり給へよ／よき母になり給へよ／われわが母を知らざれば」と記されている。「胸の病氣」で母を亡くした「夫」の母を恋う思いが、「夫の日記」の歌に強く表れており、また結婚も肯定的に語られている。

「母の誕生（昭和3・10「現代」）では、母を知らずに育った「清」が大学を出て結婚し男の子を授かる。大学の時、下宿のおかみとして「清一」を見守っていたのが母だと知り、その場を逃げ出した事もあった。しかし、子の誕生を母に伝えようと「清一」は母を迎えに行き、同居し、長年の隔たりが消え去るという小品を書いている。ここでも、妻が母となり生き別れた母の事を許している。

続く、「随想「彼女等に就て」（昭和4・9「文学時代」）の「三母と娼婦」では、「二歳の時母に別れて母を知らない」「彼は娼婦と寝ると必ず母の夢をみるという」「私への告白」から始められる。そして「私」に「彼」は、「私」の古い小説の中の歌を覚えていと言う。その歌は、妻を迎え「よき母に」なる事を望むものである。これは「母」（大正15・3「婦人グラフ」）で書かれた「夫の日記」中の「妻」への歌と同様のものであるが、「彼は「よき母になり給へよ／よき母になり給へよ」までくると「われわが母を知らざれば」を歌わず、次のように言う。「私は母のことをよく思つてゐないので。だから、女を買ふ度に母の夢を見て、ざまみろ、といふ気持——何となく女といふものに対し

て」と書かれている。母を知らない「彼」は、愛情を求める心情の裏返しとしてしか、女性が母となる事を認めていないのである。

そして「禽獣」（昭和8・7「改造」）では、人間に絶望した「四十近い独身者」の「彼」が奮場する。「彼」は、結婚したらいいじゃないかという問いかけに「それもね、薄情さうに見える女の方がいいんだから、だめだよ。こいつは薄情だなと思ひながら、知らん顔でつきあつてるのが、結局一番楽だね」と結婚を否定的に語る。また「彼」は、「夫婦となり、親子兄弟となれば、つまらん相手でも、さうたやすく絆は断ち難く、あきらめて共に暮さねばならない。おまけに人それぞれの我といふやつを持つてゐる」と言う。「禽獣」で母をイメージさせるのは、末尾の亡くなった「十六の少女の母」が「娘の死の日の日記の終り」に書いた「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し」という言葉である。「彼」が「甘いもの」として思い浮かべており、そこに「母」に対する心の揺れは認められる。が、人間と関わっているより「動物の生命や生態をおもちゃにして、一つの理想の銚型を目標と定め、人工的に、畸形的に育ててゐる方が、悲しい純潔であり、神のやうな爽かさがあると思ふ」と考えている。人との関わりを避け、情をかける事なく動物の中で生きるといふ、冷酷な心情の中にいる主人公が見出せよう。

このように川端の文章には母を恋うテーマが見られているが、それは時期によって表裏をなして表れている。「禽獣」において、

「彼」と十年近く前、心中を決意した時の「千花子」の「台翠の顔」や「十六で死んだ少女」の母の言葉に「彼」は心が弛むが、それ以外は殆ど虚無的な心境であり、母を恋う以前に人とのつながりを断とうとしている状況が見られる。「禽獣」での人の情を欲するという感情の希薄さと対照的に、同時期に書かれた「学校の花」では母を恋うテーマが表裏をなすように色濃く表われているのではなからうか。

#### 四、川端の少年・少女小説観

川端は、「コドモ座」（昭和9・6「文学界」）という随筆に、「四月二十九日」に催された月々に行われている子供向けの舞台「コドモ座第九回一周年記念公演」に、初めて行った時の事を書いている。今までの上映目録を挙げて「右の目録を見て気づく一つの欠陥は、昔話風または童話風のもが主で、子供の日常の現実生活に触れた作品のないことである。これはこの座に限らず、子供文学一般の欠陥である。（中略）この間中央公論社から、いはゆる童話にあらざる少年小説でなにを推薦するかと問はれた時、私は自作の『級長の探偵』『開校記念日』その他と、敢て答へておいた。自作の名を聞くだに顔をそむけるが常の私であるが、不幸にして、日本の作家のすぐれた少年小説を知らぬがゆゑにである」、「私などが子供の小説を書いても、雑誌社へ来る子供の反響は全く驚くばかりであるらしい。大人のための文学なんか、書く

もいやらしいと思ふ時もあり」としている。随筆「コドモ座」で川端が推奨している『級長の探偵』『開校記念日』は、「昔話風または童話風のもの」ではない「子供の日常の現実生活に触れた作品」となるよう考慮し、それが成功しているという川端の自負の表れと見ていいのではなからうか。教科書への取材と、それを作品に盛り込んで現実味を持たせた子供達の生活の中で進められるストーリーは、まさにその実感として考えることができるのではないか。

実際に、『級長の探偵』（昭和4・3）が掲載された「少年倶楽部」と、『開校記念日』（昭和8・2）の「少女倶楽部」に同時に掲載された他の作家の作品をしてみると、川端のいう「子供の日常の現実生活に触れた作品」というのは見当たらない。「少年倶楽部」「少女倶楽部」共に、時代ものや伝記を読みやすく書いたもの、冒険ものや小学生が出てきても貧乏で学校にも行けずひたむきに生きていこうとする哀話等が主なものである。この点から見ても川端の教室や夏休み中を舞台にし、授業内容も実際のものを取り上げた作品は珍しいと言えるのである。

昭和八年における川端は、子供の日常生活を書く試みとして、実際に使用されていた教科書を用いるなど、取材をしていたことが確認された。また、そのような子供向けの作品には、母を恋うという川端文学のテーマが色濃く流れ込んでいた。当時の川端は

「禽獸」での人情から遠ざかっている「彼」を書く一方で、子供向けの作品には明るい色調のものや、切なさや甘さを伴った人恋しい気持ちを書いていたのである。

注一 これらに関する作品としては、モダニズム文学に近づいた「浅草紅団」(昭和4・12、昭和5・2「東京朝日新聞」夕刊、昭和5・9「新潮」、昭和5・9「改造」)や、新心理主義の影響を受けたといわれる「水晶幻想」(昭和6・1、7「改造」)が挙げられる。ただし、後に川端自身は「ジョイスなども、一時原書を買って来て、原文と比較してみたり、ちょっと真似してみたようなこともあるが、結局大して影響はなかった」(「作家に聞く」昭和28・3「文学」と語っている。

注二 「化粧と口笛」「禽獸」「虹」と続く流れは、羽鳥徹哉氏「一九三〇年代の川端康成——『浅草紅団』から『雪国』まで——」(昭和42・8、9「国語と国文学」)で詳しく述べられている。

注三 「尋常小学唱歌 第六学年用」(第一期 国定唱歌教科書)(大正3・6、昭和7・11 文部省)の大正3・6は「尋常小学唱歌 第六学年用」の発行年を、昭和7・11は次の「新訂 尋常小学唱歌 第六学年用」(文部省)の発行年を記した。「第一期 国定唱歌教科書」は、「日本教科書大系 近代編 第二十五巻 唱歌」(昭和40・9 講談社)の表記に拠った。

注四 「尋常小学修身書 卷六」(第三期 国定修身教科書)(大正12、昭和13 文部省)の大正12、昭和13は、「日本教科書大系 近代編

第三巻 修身③」(昭和37・1 講談社)「所収教科書解題」の使用開始年度を参考に記した。

注五 「尋常小学国語読本 卷十二」(第三期 国定国語教科書)(大正12、昭和13 文部省)の大正12、昭和13は、「日本教科書大系 近代編 第七巻 国語④」(昭和38・11 講談社)「所収教科書解題」の「尋常小学国語読本」(第三期 国定国語教科書)発行年と、「小学国語読本」(第四期 国定国語教科書)の発行年を記した。以下の国語読本も「日本教科書大系 近代編 第七巻 国語④」「所収教科書解題」の発行年に拠ることとする。

注六 川端は昭和十年十二月五日、林房雄の誘いで鎌倉に転居し、以後終生鎌倉に住むことになった。詳しくは川端香男里氏編「年譜」(川端康成全集第三十五巻)昭和58・2 新潮社を参照。そのような経緯からも、川端の鎌倉に対する思い入れが見出せるのではなかろうか。

注七 「尋常小学理科書 第五学年児童用」(第三期 国定理科教科書)(大正12、昭和4 文部省)の大正12、昭和4は、「日本教科書大系 近代編 第二十三巻 理科③」(昭和41・7 講談社)「所収教科書解題」の使用年度を記した。以下、児童用の理科書はこの使用年度に拠って表記する。「日本教科書大系 近代編 第二十四巻 理科④」(昭和42・10 講談社)「所収教科書解題」も参考にした。

注八 「尋常小学理科書 第六学年教師用」(大正8、大正12 文部省)の大正8、大正12は、巻末の発行年と、「日本教科書大系 近代編

第二十三卷 理科(三) (昭和41・7 講談社)「所収教科書解題」の「尋常小学理科書 (第二期 国定理科教科書)」「尋常小学理科書 (第三期 国定理科教科書)」の「なお別にそれぞれの教師用書が発行されている」を参考に使用年度を記している。

注九 「級長の探偵」「三」では、盲目になってしまった「消一」のことや「光」「レンズ」のことが語られており、川端の祖父が晩年盲目であったこともこのテーマへの関心は重なるのではなからうか。「学校の花」(昭和8・9)「昭和8・12」(少女倶楽部)でも、六年の理科書「第二十九 レンズ」を用い人間の瞳に景色が映る仕組みに触れており、川端の作品資料の選び方からもこの盲目というテーマが重要なものとして浮かび上がっているとさえいえる。また、羽鳥徹哉氏の「川端康成と盲目の人——付・聞いてわかる文章のこと——」(「国語表現論叢 押見虎三教授退官記念論集」昭和54・5 明治図書)では、少年少女向けの作品で目の見えない人のことを書いたものとして「級長の探偵」「愛犬エリ」を挙げ、「開校記念日」にも盲目に関係した記述があると指摘している。

(なかしま のぶこ 岡山大学大学院文化科学研究科)

#### 研究室受贈圖書雑誌目録VI

国際交流基金 日本語教育紀要 (国際交流基金) 四  
国際日本文学研究会 国文学研究資料館 (国文学研究資料館) 三  
国文 (お茶の水女子大学国語国文学会) 一〇八、一〇九、一一〇

国文学攷 (広島大学国語国文学会) 一九六、一九七、一九八、一九九

国文学研究 (早稲田大学国文学会) 一五三・一五四・一五五、一五六

国文学研究誌 山邊通 (天理大学国語国文学会編) 五一

国文学研究ノート (神戸大学「研究ノート」の会) 四二、四三

国文学文献目録 (朋文出版) 二〇〇五年度版

国文学論叢 (都留文科大学国語国文学会) 四四

国文学論叢 糸井通浩教授退職記念号 (龍谷大学国文学会) 五三

国文研究 (熊本県立大学) 五三

国文白百合 (白百合女子大学国語国文学会) 三九

国文目白 (日本女子大学国語国文学会編) 四七

国文論叢 (京都女子大学大学院文学研究科研究紀要) 七

国文論叢 (神戸大学文学部国語国文学会) 三七、三八、三九、四〇

古代研究 (早稲田古代研究会) 四一

古代文学研究 第二次 (古代文学研究会) 十七

語文 (大阪大学国語国文学会) 九〇、九一

語文 (日本大学国文学会) 一二九、一三〇、一三二

語文研究 (九州大学国語国文学会) 一〇五

駒澤国文 (駒澤大学文学部国文学研究室) 四五

駒澤日本文化 (駒澤大学総合教育研究部日本文化部門) 一